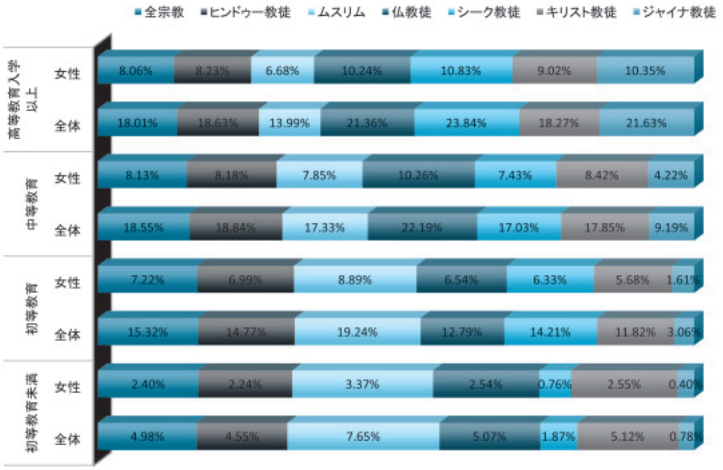
特集
インドにおける教育と雇用のリンケージ

# ムスリムの若者の教育的不平等と仕事との関係

フマユン・カビール

図1　15～29歳の若者の宗教別教育達成レベル（2011年）




（出所）2011年インド国勢調査より筆者作成。

## ●はじめに

一九八〇年代以来、年率六％以上の経済成長を続けるインドだが、その将来の発展は、中国を上回る三億三六〇〇万人の一〇歳から二四歳の若者たちにかかっている。二〇二〇年までにインドは世界で最も若い、六四％の労働年齢人口をもつと推計されている。ムスリムは一〇代までの子ども人口の最大のシェアを持っており、〇～一九歳人口の四七％を占め、ヒンドゥー教徒四〇％と比べても多いが、生活環境の厳しさから寿命が短いとも言われている（参考文献①）。本稿では、インド社会のなかでムスリムの若者が置かれている様々な不平等に焦点をあて、教育と仕事の関係について検証する。本稿の議論は、ニューデリーから六〇キロほど離れている、ウッタルプラデシュ（UP）州ハプール県のムスリムが大半を占めるサライ村で行った、人類学的社会学的なフィールド調査、家計調査等に基づいている。

## ●格差社会のなかでのムスリムの位置づけ

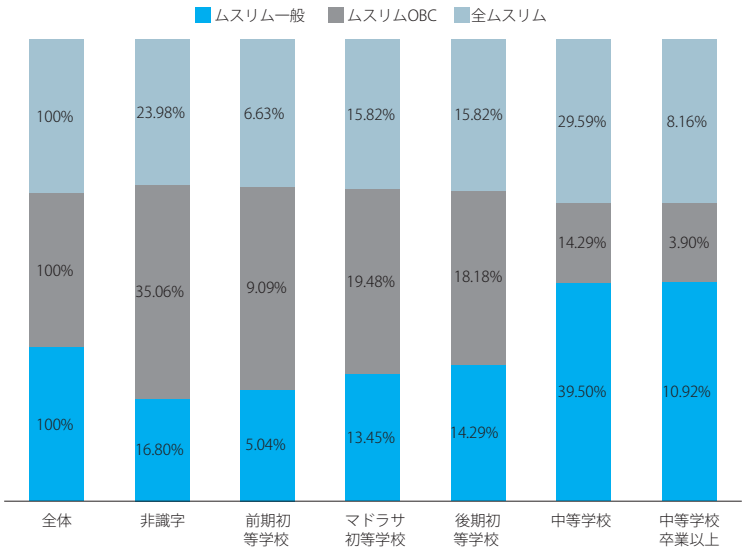
インドのムスリム人口は、少数宗教コミュニティとしては最大であり、世界のムスリム人口の一一％に相当する。これはインドネシア、パキスタンに次いで三番目に大きい。二〇一一年国勢調査によると、インドの総人口の一二％にあたる一七二万人以上がムスリムであり、対してヒンドゥー教徒人口は七九・八％である。最近のムスリムの人口成長率四・九二％は、ヒンドゥー教徒の成長率三・一六％よりも高い（参考文献②）。

教育、雇用、議会の議席において一定の席を確保する留保政策は、恵まれないヒンドゥー教徒グループの社会的不平等を減らすことを目的としている。しかし、ムスリムはこうした優遇措置を受けていないため、教育不平等を減らす効果は得られていないという研究結果がある（参考文献③、二六七ページ）。

二〇一一年国勢調査によると、インドの社会宗教的カテゴリー（Socio Religious Categories: SRC）のうち、ムスリムの識字率は、七～六〇歳以上の年齢層のなかで最も低かった。ムスリムの女子の識字率も三〇・三％と最も低く、この問題は、多くの新聞にも取り上げられた。図1に示すように、一五～二九歳のムスリムと他のSRCの若者の教育格差は、初等教育以降に増加し始める。ムスリムの若者は、他のSRCの若者に比べて、高等教育機関への入学率が最も低く約一四％であり、女子の入学率は六・六八％と最も低い。

ムスリム社会の教育水準が低いことは、生活水準が最低であることに密接に関連している。ムスリムの一日の平均消費額は三二・七ルピーであるのに対して、シーク族は五五・三ルピー、クリスチャンは五一・四ルピー、ヒンドゥー教徒は三七・五ルピーと、他の宗教に比べて消費額が低いという調査もある（参考文献④）。

図2　サライ村若者のムスリム一般とOBCの教育水準の違い（2015年）




（出所）筆者のフィールド調査 2012-2013、2014-2015 年より。

## ●サライ村のムスリムコミュニティ

サライ村は、UP州西部に位置するハプール県にある。二〇一一年国勢調査によると、一三〇四世帯、八一三一人の人口を抱えている。このうち、八七家計（一・〇七%）がSC（Soheduled Caste）であり、ST（Soheduled Tride）はいない。村の識字率は六三・七三%で、全国平均七三%よりもはるかに低く、UP州の平均（六七・六八%）と比べても低い。女性の識字率（五一・八一%）が男性の識字率（七五・〇一%）よりも二三%低く、教育における男女格差は大きい（参考文献⑤）。

サライ村のムスリムは、社会的に階層化されており、同族結婚の慣習、先祖からの職業的特化、地位に基づく社会的関係によって特徴付けられる複雑な階層構造になっている。これは、ビラーダリー（biradari：兄弟を示すペルシャ語の用語）システムと呼ばれている。Tyagi と Rajput の姓を持つムスリム家族は、チョウドリー（Chowdhury）として区別され、村のビラーダリーシステムの階層の最上位に位置している。チョウドリー家系には耕作者と土地所有者がいるが、村の土地を所有しているのは数家族だけである。インドのSRCの分類によれば、チョウドリー家族は「ムスリム一般」グループに属し、留保政策などのアファーマティブ行動の下では特権は与えられていない。

村の農業は、耕作地の所有権をもつ少数のチョウドリー家族に握られ、他のグループの家族は農業日雇労働者として、収穫と栽培の季節に働いている。同時に、土地のないチョウドリー家庭も、季節性の農業雇用に依存している。土地所有の分断を避けるために、農業以外の賃金収入のある家族がいる場合も、農業には従事している。

調査した七〇世帯のうち、三六世帯がムスリム一般（チョウドリー家系を含む）と三四世帯がムスリムOBCであった。調査した全世帯の六三%が土地を持たず、一〇%が五ビガ（Bigha＝〇・六三七エーカー）未満の土地しか持たない。一三%の世帯が二〇ビガ以上の土地を所有していた。ムスリム一般世帯のうち、二八%が土地なしであり、一九%が五ビガ未満の農地を所有。調査世帯人口の二五%を占めている地主チョウドリーの世帯は、二〇ビガ以上の土地を持っていた。しかし、ムスリムOBC世帯は全く土地を所有しておらず、土地所有の不平等は、ムスリム一般とOBC世帯の間だけでなく、ムスリム一般世帯の間でもみられた。つまり、ほとんどのムスリム世帯が耕作地からの農業収入では生活できないことを示している。

カーストと社会階級の違いは、仕事の内容の違いにつながる。たとえば、ムスリムOBC世帯のどれも、通常の給与雇用を主な職業としていないのに対し、ムスリム一般世帯の六%は主に民間部門の給与雇用を主な仕事としている。ムスリム全体でみると、常雇用の給与取得者はわずか三%である。ムスリム一般家庭は、職人的な職業の割合が多い。ムスリムOBC世帯は、村を超えた経済社会ネットワークへのアクセスが限られているため、職人技の訓練の機会が制限されていると考えられる。

## ●多階層化する教育と仕事の不平等

サライ村のムスリム家庭の若者仕事は、社会的宗教的なカテゴリー、土地所有、収入、性別、そして拡大親族やビラーダリーといった社会的ネットワークの有無などの様々な要因に影響される。これら要因は、ムスリム一般家庭にも、ムスリムOBCにも、教育水準と将来の抱負に違いを与えている。

インドでは、ムスリムの多く住む地域で初等教育以上のレベルの学校はほとんど存在せず、ムスリム人口規模に対して教育機関が少ない状態が続いていた。サライ村でも六〇年以上にわたって、一九三二年にコミュニティリーダーによって設立されたムスリムの学校・マドラサ（madrasa）でしか勉強ができなかった。

現在サライ村には、公立小学校一校、中等学校一校、混成教育の私立マドラサ校（マドラサと学校の両方のカリキュラムを採用している）二校を含む六つの教育機関があり、約二二〇〇人の学生が勉強しており、学校が増えたことにより就学率は大きく上昇した。

### ⑴カースト・経済力による教育と仕事の違い

土地所有権や所得などの経済力の違いが、ムスリムのなかでも教育水準と仕事内容に大きな差を与えている。地主チョウドリー家族や比較的高所得の家族（高収益の商業、食料品店などに従事している家族）出身の若者は、地域社会から出て、都市部の学校で教育を受ける傾向がある。村外の専門学校で職業教育を受ける者や、パプール市やメーラト市など近隣のカレッジで学位取得をめざす者もいる。少数だが、大都市部の大学に通う学生もいる。

土地なしで低所得のイスラム一般家庭やイスラムＯＢＣ家庭出身の若者は、日雇い労働、手工芸ジュエリー製作、修理工や建設工事、乳製品や野菜の販売などの仕事に就くものが多い。また、ムスリム一般とムスリムＯＢＣの若者では、高等教育への志向と仕事に持つビジョンが違っている。土地なし家庭出身の若者たちは、中等教育以上のレベルには進学せず、学生であっても同時に仕事も行っている場合が多い。

図2では、一五～二九歳のムスリムＯＢＣの三五％以上が非識字であり、ムスリム一般の一六・八％の二倍の非識字率を示している。教育格差は、中等教育以降に徐々に増加する。ムスリムＯＢＣ家族の若者たちは、高等教育を志向するモチベーションがはるかに低い。ＯＢＣの若者のうち、一四・二九％が前期中等学校レベルまで勉強を続けたいと考えているのに対して、ムスリム一般の若者の三九・五％は後期中等教育レベルまで教育を続けている。一方、ムスリムＯＢＣによる後期中等教育後の教育への参加は、ムスリム一般より七％低い（図2）。中等以降の教育への志向が低いことは、多くのムスリムの若者にとって構造的制約を作り出し、非組織部門での自営業しか仕事がみつけられないことに結びついている。

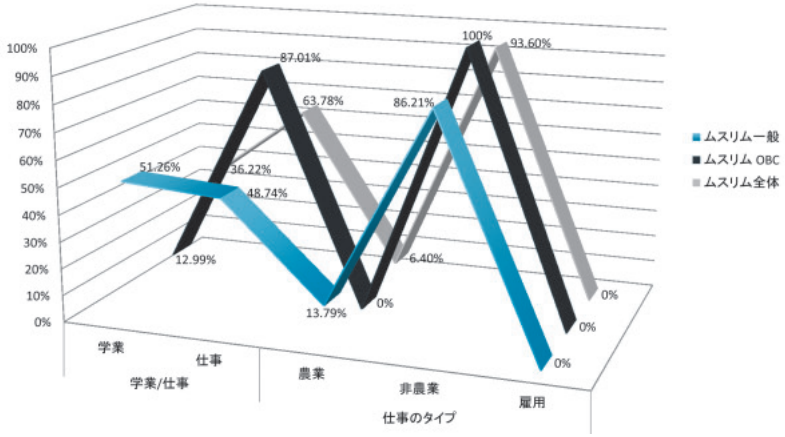
若者の就学と仕事への参加状況と仕事の性質を比較すると、階級階層が大きく影響していることがわかる。図3に示すように、ムスリム一般とＯＢＣの若者の違いは、経済力の格差と社会的ネットワーク、文化資本の格差によるものであることがわかる。就学ではなく仕事に就いているＯＢＣの割合は八七％と非常に高いが、ムスリム一般の若者は学生と就労は大体半々であった。ＯＢＣ家族のなかで働く若者の割合がはるかに高いことは、教育への経済的負担が大きいことを示している。こうした負担は、若者の社会的つながりや移住可能性に影響を及ぼすが、ムスリム一般の若者にはこの点で相対的に特権がある。チョウドリー出身の若者は、ノイダ（デリーとハプールの隣接都市）で零細事業や小規模自営業者など、自営タイプの仕事に就いている。両方のグループが主に非農業の仕事で働いているが、その仕事の中身は、ステータス、権力、地位、賃金などの点でかなり異なっている。ＯＢＣの若者は、より低賃金で社会的ステータスのない仕事（日雇い労働など）に従事する傾向があった。注目すべきは、ムスリムの若者で正規雇用に就いている若者が全くいなかったことである。

### ⑵拡大親族と社会的ネットワーク

イスラム一般とＯＢＣのもつ社会ネットワークの広がりの違いが、若者の仕事の性質に影響を与えている。チョウドリーやイスラム一般の若者のうち、特に土地を所有し、優れた社会的地位を享受している若者は、コミュニティを超えた自営業や小売業に従事する傾向があるのに対して、ムスリムＯＢＣの若者は、コミュニティ外にネットワークがなく、自身の事業を始めるのが難しい。土地所有階級として、チョウドリー家族はＵＰ州の他の地域のビラーダリーシステムと広くつながっており、親族の経済的つながりも強く、雇用機会に結びつくことが多い。サライ村のチャウドリー家の若者たちも、これらの親族ネットワークを利用して、仕事やインターンシップの機会をみつけ、小規模な商取引を始めるためにコミュニティを超えて移動することもできる。対照的に、イスラムＯＢＣの家族は、親族や親戚のつながりはあるが、カースト構成員の経済的社会的地位が低いために、こうしたつながりから得られるベネフィットは少ない。

ノイダでは、修理工場や小売業

図３　サライ村のムスリム若者（15 ～ 29 歳）の社会宗教的カテゴリー別学生と仕事および仕事のタイプの分布（2015 年）




（出所）筆者のフィールド調査 2012-2013、2014-2015 年より。

を行う若者の大部分が、サライ村のチョウドリー家庭の出身であった。サライ村のムスリムＯＢＣの若者は、主に建設業やその他の産業の日雇い労働者であり、ビジネスを始めた事例はなかった。

たとえば、二二歳のチョウドリー・ゼシャン（Chowdhury Zeshan）は、一四歳で学校を辞め、サライのテーラーショップでインターンとして働いた。二年後、テイラーの仕事で一カ月に六〇〇〇ルピー（約二万円）を稼ぐようになったが、彼はエアコン修理に関心を持っていた。ますます都市化するノイダのライフスタイルのなかで、エアコン修理は需要が伸びるとわかっていたからである。そこで今度はエアコン修理工場でインターンとして働き始め、最終的には自分の店を始めた。現在は従業員を雇い、ピークシーズンには四〇～五〇万ルピー（約六七～八五万円）を稼いでおり、家族を支えることができるようになった。一方で、数は限られているものの高等教育への進学も増えており、それによって、チョウドリーの若者の間では、他の社会的ネットワークからの利益を得る可能性も高まっている。たとえば、二〇代の若者シャー・アリ（Sher Ali）は、大学の友人とのつながりを通じて、ノイダのテク・マヒンドラ社のコールセンターでの仕事をみつけた。彼の月給は七五〇〇ルピー（約一万三〇〇〇円）で、ノイダに住んで家賃と食事を賄うには十分であった。仕事の後、彼はメーラトの私立大学のＢＡコースで学んだ大学授業料のため、家族への仕送りはできなかったが、ＢＡコースを修了した後、さらに法律の学位を取得し、行政職に就くことを希望している。シャー・アリのように、チョウドリーの若者は仕事と学習の両方を選ぶことができるが、ＯＢＣ家族の若者は低賃金の労働に就くしか選択肢がない。

## ●むすびに

ムスリムの若者の間の、教育の不平等と仕事との関係について論じてきた。ムスリムの教育的後進性と非正規部門での低賃金の雇用は、主に保守的なイスラム教育の優先や高い出生率などによるところが大きいと思われてきた。しかしサライ村では、六〇年以上にわたって公立学校が不足していたことが、ムスリム社会の教育水準を低いままにしていた。サライ村に公立学校と私立学校が設立された後は、初等・中等教育学校への入学は増加している。また、ムスリムの若者の教育水準と仕事の性質は、土地所有と収入などの経済力に影響されている。ムスリム一般世帯出身の若者には、社会的地位の高いチョウドリーカーストとの結びつきや、親族の住む範囲が広いため、サライ村以外でも小規模な商店や起業行動の可能性があるが、ムスリムＯＢＣの若者たちは、ＵＰ州のムスリム共同体内の社会的階層が低いために、起業の機会に恵まれないことが明らかになった。これは、ムスリム社会内部で、社会的宗教的な地位と階層の面と経済力の両面で格差が拡大していくことを示唆している。

（Humayun Kabir ／ダッカ・ノースサウス大学准教授　翻訳＝中村まり）

**《参考文献》**


① The Times of India, Varmal, Subodh, "Muslims Have a Largest Share of Young, but also Die Early." (2016, Jan 13)

② Census of India (COI), Religion Census 2011.

③ Desai, Sonalde and Kulkarni, Veena, "Changing Educational Inequalities in India in the Context of Affirmative Action," *Demography*, Vol.45 (2), 2008, pp. 245-270.

④ Ghosh, Palash. "Surprise, Surprise: Muslims are India's Poorest and Worst Educated Religious Group" *International Business Times*, 2013.

⑤ Census of India (COI), Salai Population Ghaziabad Uttar Pradesh.